

山場前後の比較から変容ときっかけを読み取る物語文の授業
～高めた自力読みの力を用いて物語教材を読み進める学習者の育成を目指して～

小千谷市立小千谷小学校
三本 智也（平成29年度）

予測困難な時代を生き抜く力の獲得を目指す上で、児童が自ら作品を読み進め、物語の世界に触れて、人生経験を豊かにしていくことができる『自力読みの力』が求められている。さらに、『自力読み』と大きく関わる物語の主題と、山場の読み取りとのつながりは密接である。

そこで、山場において、観点を整理した比較を取り入れ『逆思考の読み』を促すことで、児童は物語で起こる変化に気づき、変容やその原因となる出来事へと思考を広げ、山場の深い読み取りができるようになる。と考える。

・『自力読みの力』と『山場の読み取り』との結び付き

二瓶(2013)において、「『自力読みの力』とは、様々な観点から作品と関わり、自力で作品を読み進めていくことのできる力であり、そして、その作品が読者である自分に最も強く語りかけてきたこと(作品の心)を明らかにすることが『物語の確かな読み』である」と定義している。加えて、小出・麻生(2011)において、「山場は、クライマックスを含み、作品の主題の読み取りと密接に関わる最も重要な場面である」と述べているように、作品の主題<二瓶(2013)においては「作品の心」と定義>の受け取りにおいて、山場における変容の深い読み取りが必要だと考えた。

I 研究主題設定の理由

1 先行研究より

自力読みにおける、作品の主題と山場での変容の読み取りは、深く関わっている。二瓶(2013)は、「クライマックスこそ、変容が最も大きく見られる場面であるため、物語において最も重要である」と述べているように、その重要性が伺える。更に、山場での深い読み取りに関する観点として『最も大きく変わったことは何か。(変容した主体)』『どのように変わったのか。(変容の様子)』『どうして変わったのか。(変容の因果関係)』を示している。そこで、山場において、この三点について読み取らせるための授業を構想することで、作品の主題を受け取ることに近付くと考えられる。

そして、白石(2015)では、変容と因果関係を捉えるための読み方として、『逆思考の読み』を提唱している。(図1)これは、物語の結末の姿を捉えて、「なぜこのようなことになったのか」と物語の始めへとさかのぼっていく読み方である。始めから順を追って中心人物の行動から心情を考える授業では、概略を確認するだけに陥りやすいことを指摘し、『逆思考の読み』により、「考える国語の授業」が成立すると述べられている。

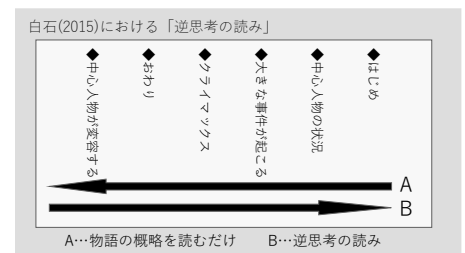


図1 逆思考の読み 白石(2015)

2 自身の実践と子どもの実態

今までの実践では、物語の構造を把握した後、一場面から順を追って中心人物の心情にのみ焦点を当てる授業を進めることが多かった。そして、山場に入った時に三点の読み取りをさせようとした。児童はどのような叙述から変容を読み取ればよいのか困惑する姿や、山場だけを見て変容を見付けようとする姿が多く、物語全体を踏まえて変容を読み取った児童は少数に留まってしまっていた。また、物語の変容を読み取ることができても、変容のきっかけとなる出来事との因果関係を振り返りに記述している児童は少ない。次の授業で、再度整理して確認をする時間を設ける必要があった。

これには、山場で変容を考える際に、自身が児童に問いかけた「最も大きく変わった所はどこか。」という抽象的な表現が児童らには理解しづらかったことが考えられる。倉又(2014)において、クライマックスの一文を検討する学習においても同様な点を指摘している。

白石(2015)の『逆思考の読み』を自学級で行った際にも、どの叙述に注目して変容の姿を捉えたらよいのか観点が曖昧になり、うまく読み取ることができない様子が多く見られた。そのため、児童はどんな変容のきっかけを考えていくのか、追究課題も不明確になってしまった。

3 目指す子どもの姿とそれに迫るための方策

先行研究と自身の実践の振り返りを基に、「山場において変容を捉え、そのきっかけを山場での出来事と結び付けることのできる児童」を目指す子どもの姿と設定する。本研究では、物語教材の山場において、まず、観点を示した比較を行い、叙述の変化から変容を捉える活動を取り入れる。さらに、比較を行った観点において、因果関係へと迫る『逆思考の読み』を促す問い返しを組み合わせることで、変容の主体・変容の様子・変容の因果関係を読み取ることができるのではないかと考える。

II 研究仮説

物語の山場において、観点を示した比較を設け、逆思考の読みにつなげることで、児童は物語の変化から物語全体の変容を捉え、そのきっかけを山場の出来事とつなげて読むことができるであろう。

III 研究内容と方法

本研究では『逆思考の読み』へとつなげるために、以下の手立てを講じ、授業記録を基にした児童の発言、抽出児童の振り返りから、その有効性を検証する。

1 観点を示した比較による変容の捉え

(1) 比較の観点を要素について

まず、比較の観点について、先行研究をもとに整理を行う。白石(2015)では、『文学作品読みの10の観点』を示しており、そこから児童が山場を読む際の直接的な手掛かりとなりうる要素を図2のように示す。

また、二瓶(2013)では、物語教材は四つの型に分けられることを示し、基本四場面構成における前ばなしと後ばなしの比較の有効性も説いている。

そこで、『文学作品読みの10の観点』を踏まえ、基本四場面構成における変容に迫るための比較の観点を図3のように設定した。

【要素①設定（時・場所・季節・時代）】
【要素②人物（中心人物・対人物・語り手）】
【要素③人物関係】
【要素④くり返し（言葉・場面）】
【要素⑤中心人物のこだわり】

図2 比較の要素

(2) 比較の観点

観点Iは、中心人物の様子や、置かれている状況に関する叙述を比較することで、見た目や立場から、変容を捉えることにつながる。観点IIは、中心人物の言動に関する叙述の比較を行うことで、叙述を基に言動の変化に関する人物の意図を考えることにつながる。

観点IIIは、中心人物の、対人物に対する思いや言動等の叙述を比較する。白石(2015)では、中心人物と

対人物との関係は、欠かすことのできない観点であり、中心人物を変容させる重要な存在が対人物だと述べている。対人物に対する思いを叙述から読み取ることで、変容につながる。観点IVは、物語の中で強調されるくり返し登場するセリフや叙述の意味を比較することで、中心人物の変容や作品のテーマや主題へと考えを広げることにつながる。観点Vでは、前ばなしと後ばなしにおける中心人物を取り巻く環境等の設定について比較を行うことで、物語全体の変容やそのつながりへと考えを広げる。

	比較の観点	要素
I	【様子や状況比較】 中心人物の様子や置かれた状況に関する叙述の比較	①設定 ②人物
II	【言動比較】 中心人物の言動に関する叙述の比較	②人物 ⑤中心人物のこだわり
III	【対、対人物比較】 中心人物の、対人物に対する叙述の比較	②人物 ③人物関係
IV	【強調の意味比較】 くり返し登場する（強調されている）言葉の意味の比較	④くり返し
V	【物語の設定比較】 基本四場面構成の前ばなしと後ばなしにおける設定の比較	①設定 ②人物 ③人物関係

図3 比較の観点

IV 研究の実際

1 「大造じいさんとがん」(学校図書) 十日町市立水沢小学校5年 (令和4年12月実施)

T1: 大造じいさんは残雪のことを英雄って呼んでるよね。
C1: そう。あと、えらぶつも言っていた。すごい人って。
C2: ///また戦おうって最後に残雪に言ってる。
T2: 1、2場面では、残雪のことを何て言ってるんだっけ？
C3: えーと、ちがった、///どこだっけ、「いまましいい」。
T3: いまましいいってどういう意味？
C4: すごく腹が立ってる、すぐにやっつけたい。
C5: タンク作戦とか色んな作戦してたし。
T4: 今回の作戦が始まる時の大造じいさんはどんなこと言ってる？
T5: セリフに注目してみて。
C6: さあ戦闘開始だ。やる気マックス。
T6: いいね。やる気マックスだね。
C7: ひとあわふかせてやる。
T7: これもあったね。ひとあわふかせる。すごいやっつけたいのね。
T8: また戻るけど、最後は何て言ってたっけ。
C8: 英雄よ。また戦おう。

本実践では、中心人物である大造じいさんの、対人物である残雪に対する呼び方(観点III)について比較の問いかけを「T1」「T2」で行った。前場面からは「いまましいい」「たかが鳥」「あの残雪め」という叙述から、「えらぶつ」「英雄」という叙述に変化していることを捉えることができた。また、大造じいさんのセリフの比較(観点II)を「T4」「T8」で行い、「ひとあわふかせてやる」と「また戦おう」という叙述の変化から、残雪に対する大造じいさんの心情の変容をつかむことができた。

C8:英雄よ。また戦おう。
 C9:さっきとめっちゃ変わってるじゃん。///ちがう。
 C10:そう、じいさん///真反対だ///
 T9:何がきっかけで残雪への思いが真反対に変わったの?
 C11:///あれじゃない?残雪が仲間を助けたところ。
 C12:同じ、はやぶさから。
 T10:でも、いままじいんだよ?それだけやっつけたかっただよ、何で?
 C13:///じいさんのがんを助けてくれたし、(前時の山場の掲示物を見る)
 C14:あと、堂々とした顔の態度とか、強い敵に向かう勇気とか...
 C15:いっぱいあって///ここ、じいさんは強く心を打たれたって書いてあるとこ。

⑤大造じいさんが残雪のことをいままじいからがんの英雄と
 なったのは、じいさんのかっていた仲間のがんのためにはやぶ
 さに立ち向かったからだと分かった。Sさんの「強く心を打たれ
 た」からという意見で分かった。

次に、「C9:めっちゃ変わってる」「C10:真反対」という発言から、い
 ちばん大きな変化に気付く姿を見取り、「T9」で『逆思考の読み』で因果
 関係へとさかのぼる問い返しを行った。すると、児童は、教室に掲示して
 ある山場での出来事に注目し、「C11~15」で残雪が大造じいさんのおとり
 のがんを助けたことや、頭領としての堂々たる態度、最期を感じてもばた
 つかない姿から、大造じいさんが強く心を打たれた山場での出来事と結び
 付ける姿があった。

抽出児童の振り返りは、中心人物の心情の変容の読み取りと、きっかけ
 を「仲間のがんのためにはやぶさに立ち向かった」「強く心を打たれた」
 と、山場での出来事と結び付けて記述している姿があった。

＜本実践における成果と課題＞

- 観点を示して比較をすることで、中心人物や対人物との関係に注目して「全く違う」「大きな変化が起こって
 いる」ことを児童は捉えることができ、『逆思考の読み』で因果関係へと思考をさかのぼる問い返しをした際
 に、山場の出来事に立ち返る姿が見られた。
- 中心人物と対人物の登場する場面において、「C10(残雪への思いが)真反対になっている」から、観点Ⅲでの
 比較は、対人物に対する中心人物の変容を捉えることにつながっていた。本教材文では、観点Ⅱの比較は、
 「C6,C7」から、観点Ⅲの比較による対人物への思いを読むための補足的な要素として働いていた。
- △児童の振り返りから、児童の捉えた変容が、叙述の違いをそのまま用いた直接的なものがほとんどであった。
 多くの変容の捉えが、大造じいさんの残雪に対する「いままじい→がんの英雄」だけであり、物語全体を
 踏まえ、児童が自分の中に落とし込んだ読みなのかは不明である。児童の発言から「C4:腹が立つ、すぐにや
 っつけたい」「C6:やる気マックス」「C5:色んな作戦をしていた」「堂々と戦おう」などの中心人物の言動の
 意味を問い返すことで、叙述に描かれていない部分まで思考を広げることができるのではないかと考える。

2 「世界でいちばんやかましい音」(東京書籍)小千谷市立小千谷小学校5年(令和5年6月実施)

T1:このお話は前ばなしと後ばなしがある物語だけど、前ばなしではどんなことが書かれていた?
 (前ばなしの本文を提示)
 C1:ガヤガヤの町の説明。///アヒルとかうるさいってこと。
 C2:あとさ、みんな集まって歌いだす。
 C3:めっちゃ迷惑だわ。///だよな。
 T2:後ばなしでは、どんなことが書かれている?(後ばなしの本文を提示)
 C4:静かになった町でしょ。
 C5:おんじ。///何が?
 C6:///アヒルとか警察官とか。///そのとこ。
 C7:ああ///こもじゃない?(掲示物を指さす)
 T3:町の様子が変わったことが分かる所を線で結んでみよう。(掲示と同じ内容のプリント配布)
 C8:これそのまんまじゃん。めっちゃある。///
 C9:歌は?あの歌。///
 C10:///えー、静かに話すで///一緒で
 C11:6個見つけた///
 T4:どんな変化があった?
 C12:扉をやさしくすつと開めるようになった。
 C13:同じ。///まだある。
 C14:この、叫んでた町の人が静かに話すようになった。
 (略)

T4:どんな変化があった?
 C12:扉をやさしくすつと開めるようになった。
 C13:同じ。///まだある。
 C14:この、叫んでた町の人が静かに話すようになった。
 (略)
 T5:じゃあ一つ目、扉のボタンは迷惑なんだよね。うるさいし、後ろの人危ないし。
 T6:スツと開めるのはどうなの?
 C15:いい。うるさくない。後ろの人危なくない。///
 C16:ちゃんと後ろの人のこと考えて。初めての思いやりだ。
 T7:二つ目、話すようになったことは?他人の話なんか何も聞かなくていいぞ。だったよね。
 C17:自分勝手。///ちゃんと聞けるようになった。よくなった。
 (略)

C8:これそのまんまじゃん。めっちゃある。///
 C9:歌は?あの歌。///
 C10:///えー、静かに話すで///一緒で
 C11:6個見つけた///
 T4:どんな変化があった?
 C12:扉をやさしくすつと開めるようになった。
 C13:同じ。///まだある。
 C14:この、叫んでた町の人が静かに話すようになった。
 (略)
 T5:じゃあ一つ目、扉のボタンは迷惑なんだよね。うるさいし、後ろの人危ないし。
 T6:スツと開めるのはどうなの?
 C15:いい。うるさくない。後ろの人危なくない。///
 C16:ちゃんと後ろの人のこと考えて。初めての思いやりだ。
 T7:二つ目、話すようになったことは?他人の話なんか何も聞かなくていいぞ。だったよね。
 C17:自分勝手。///ちゃんと聞けるようになった。よくなった。
 (略)

T8:ガヤガヤの町が、こんなに変わったのはどうして?
 C18:誕生日の日にだれも音を止めたからでしょ。
 C19:〇さんに付け足して、みんなが静かにして、しーんとなって、自然の音とか静けさを気に入って書いてあ
 るから、町が変わったと思います。
 C20:え、みんな聞いてた。///出さず。
 T9:誰が気に入ったの?
 C21:みんな。町の人。王子様も。
 T10:それって、どこから分かる?
 C22:ここで、「飛び跳ねたり、手を叩いて喜びました」ってある。
 C23:どこ、うしろ///ああ...
 T11:じゃあ静けさを気に入る前の王子様はどんな人?
 C24:めっちゃうるさい。うるさい人。バケツをひっくり返す遊びする。
 C25:///世界一やかましい音を聞きたがってる。///それで誕生日///
 C26:しーんとしたのがプレゼント的な...
 C27:///結果オーライってことでしょ。
 T12:結果オーライってことは、よくなったの?

本教材文は、基本四場面構成で、ガヤガヤという町とそこ
 に住む人々の様子、町の入り口にある立て札の書きぶりにお
 いて、対応している叙述が多くあり、前ばなしと後ばなしの
 比較を取り入れやすい特徴がある。そこで、「T1,T2,T3,T4」
 で前ばなしと後ばなしの比較(観点Ⅴ)を取り入れた。町の様
 子で変わったことを探す活動では、対応している部分を線で
 結び、町の中で起こっている多数の変化を捉えることができ
 た。

そこから、言動の意味を問い返してみると、町の人々の行
 動について、叙述を基に「C16:思いやり」「C17:自分勝手→聞
 けるようになった。良くなった。」という自分たちの解釈を取
 り入れて変容を捉える姿があった。町の中の様子や人々の行
 動だけではなく、町の人々の性格や、町全体の雰囲気が大き
 く変わっていることに気付くことができた。

町の様子が大きく変わったことを捉えた児童の様子を
 「C8,C11,C13,C16,C17」から見取り、「T8:こんなに変わった
 のはどうしてか」と『逆思考の読み』で因果関係へ迫る問い
 を投げかけた。「C18~21」から、児童は町の様子の変化と、
 山場の王子様の誕生日が沈黙してしまった出来事との結び付
 きを読むことができています。

しかし、児童の発言では「C22」で中心人物が静けさをとて
 も気に入った様子を読み取ったが、中心人物の様子に関する
 比較(観点Ⅰ)を行うことで、どれほどやかましい音を聞きた
 がっていた人物なのかを捉え、山場での出来事をより詳細に
 捉える補足的な問いかけとして働いた。

④誕生日がしんとなったけど、王子様が気に入ったから、町もよくなって良かった。うるさくて迷惑な人たちから、静かでやさしい人の町に変わっている。

<児童M・A>
ガヤガヤが自分勝手にうるさい町から、静かで優しい町に変わったことが分かった。王子様の誕生日は成功だと思う。事件が始まるきっかけも、まとめてみたい。

には気付くことができたが、他の場面での出来事が全て山場に向かっていくことには気付きづらい。そこで、物語全体を通して読むためにも『逆思考の読み』を生かせるのではないかと考える。

抽出児童の振り返りとしては、物語全体の変容と、そのきっかけを山場の出来事と結び付けて記述する姿が見られた。「町もよくなってよかった」と、自身の思いも含まれていた。また、『逆思考の読み』で山場の出来事に変容の因果関係を見付けることができたが、他の児童の振り返りからは、「もっと前場面にさかのぼってきっかけを考えてみたい」という記述があった。多くの児童が変容の前にはきっかけがあること

<本実践における成果と課題>

- 実践(1)の成果の一つ目は、本実践においても、「C8,C11,C13,C16,C17」から、物語の大きな変化を捉え、「C18~21」その因果関係を山場での出来事に立ち返って探すことにつながっていた。
- 前ばなしと後ばなしの叙述が対応していて、変化が読み取りやすい物語教材においては、観点Vにおける比較を行うことで、大きな物語全体の設定の変化を捉えることができた。実践(1)の課題から、町の人々の言動の意味を問い返すことで、叙述を根拠とした「自分勝手、迷惑な人→思いやりある、相手のことを考える人」といった解釈まで読みを深める姿があった。
- 抽出児の振り返りから、「事件がはじまるきっかけもまとめてみたい」という記述があった。『逆思考の読み』を続けていくことで、山場に向かう最初のきっかけをつかむことにつながり、さらに物語全体のつながりを読み深めることができるのではないかと考える。
- △本実践では、物語の変容のきっかけが中心人物の心情の変化と結び付いているため、中心人物の心情の変化の読み取りが浅い場合には、補足的に観点Iを行う必要があった。また、後ばなしに中心人物が登場しない教材文の場合は、最初に人物についての比較ができなかったため、教材文の特徴に応じた使い分けが必要である。

V 本研究による成果と課題

1 研究の成果

観点を示した叙述の比較を行うことで、児童は中心人物の言動や設定の変化を基に、物語の変容に迫る姿があった。これは、比較の観点により、注目すべきことが明確になったためと考えられる。しかし、読み取った変化における言動の意味を問い返すことが必要であった。また、「比較→変容→逆思考の読み」を促すことで、児童は山場での出来事の叙述に立ち返り、変容の三点についてつながりをもって読み取ることができていた。

中心人物と対人物の関係に迫る物語教材においては、観点IIIによる比較を行い、前ばなしと後ばなしに物語の設定が描かれている教材においては、観点Vによる比較により変容を捉えることができた。観点I・IIのような中心人物に関する比較は、山場での出来事と結び付きが強いため、変容をより詳細に捉えるためには必要な観点であった。

2 今後の課題

本研究では、白石(2015)における『文学作品読みの10の観点』と二瓶(2013)における『物語教材の四つの型』を基に、基本四場面構成における比較を行った。今後は、前ばなしや後ばなしが描かれていない他の型の教材文でも有効に働くのか、詳細な比較の観点の精査を行っていきたい。また、『自力読み』につながるための主題の読み取りとの関連についても児童の発言や振り返りの記述を基に、作品ごとに事例をストックし、多くの実践を積んでいく。

< 引用・参考文献 >

- 全国小学校国語研究所『言葉による見方・考え方を働かせる「読むこと」の授業づくり』明治図書 2019
- 二瓶弘行『物語の「自力読み」の力を獲得させよ』東洋館出版 2013
- 小出湧三/麻生健人『文学作品のよみを豊かに～先生と子どもたちで創る国語教育～』長崎出版 2011
- 倉又圭祐『物語教育における読解力を高める指導方法の工夫』教育実践研究第24集 2014
- 白石範孝『白石流国語授業シリーズ1 物語の授業』東洋館出版 2015